

2018年度(平成30年度)学校評価自己評価表

城東中学校区	校番 13	福山市立蔵王小学校
最終更新日		2018年(平成30年)4月1日

I 福山市

<p>ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。</p> <p>ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。</p>

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状
<p>中学校区で統一した育成する力(21世紀型“スキル&倫理観”)のもと、9年間を見据えた系統的な児童・生徒の指導の在り方を協議し、自ら考え学ぶ授業を推進する。</p>	<p>根拠を明確にして、自分の考えを表現したりする力が育ちつつある。</p> <p>個人差はあるが、自己有用感、自己肯定感が低い傾向にある。</p>

<p>育成する力 (21世紀“スキル&倫理観”)</p> <p>めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)</p> <p>中学校区として統一した取組等</p>	<p>スキル ○課題を見つけ、解決の道筋を見いだす力 <課題発見・解決力> ○根拠をもって相手を説得する力 <論理的思考力・表現力> 倫理観 ○自他を認め合い思いやる態度 <協働性> ○自らの行動を律し、高まろうとする態度 <自己指導力></p> <p>目標を定める子 ねばり強く学ぶ子 自らを律し行動する子</p> <p>校区スタンダードで目指す児童・生徒の姿(達成基準)を系統的に4つのステージで捉え、校区で統一した取組を進め、共通の指標で評価していく。 自ら考え学ぶ授業改善の実現に向けて、校区全体で児童・生徒に育むスキルと倫理観を明確にする。系統的指導のあり方を協議の柱として、校区授業研究を活性化する。</p>
---	--

III 自校

ミッション
○児童が自ら考え学ぶ授業づくり・質の高い教育実践を通して、人(児童・職員)が育つ学校をつくる。
学校教育目標
豊かな心を持ちたくましく伸びる子

現状
<p><児童生徒> ○思考・表現のスキルの提示・ふり返りの提示と統一指導により、協働的な課題解決力は向上している。また、目標を持って継続的に自己を鍛えようとする意欲や規範意識の高まりは、自己肯定感の高まりにもつながっている。しかし、自ら課題を見出し、自己の取組や結果を評価・修正しながら責任を持って課題を解決しようとする自己指導力には個人差が大きい。</p> <p><授業> ○昨年度まで人権教育指定校を受け、図画工作科・国語科を中心に問題解決的な単元モデルや思考・表現のスキルを学校全体で共有し、授業における実践を進めることができた。 児童が題材・教材に対して、「問い」を持ち、課題解決意識を必然的に抱くような教材提示の仕方や児童の対話的な学びを生み出す教師の「切り返し」や「問い直し」の質を向上させていく必要がある。また、自己指導力を鍛えるという点で「ふりかえり」指導のあり方も実践的研究を進めていく必要がある。</p>

育成する力 (21世紀“スキル&倫理観”)	課題発見・解決力	論理的思考力・表現力	協働性	自己指導力	
めざす子ども像	低学年	課題を見つけ、解決しようとしている。	相手の意見を最後まで聞き、自分の考えを持ち、相手に伝えることができる。	友だちの良いところに気付いている。	様々な活動に進んで挑戦し、責任を持ってやり遂げようとしている。
	中学年	課題を見つけ、既習事項や経験をもとに解決しようとしている。	相手の意見を取り入れながら、根拠を明らかにして自分の考えを伝えることができる。	自分や友達の良さに気付く、お互いに認め合っている。	自らの行動や学びが適切であるか振り返りながら、より良い生き方を考え創り上げようとしている。
	高学年	課題を見つけ、見通しを持って仲間と共に解決しようとしている。	自分の意見と相手の意見を比べながら聞き、根拠を明らかにして自分の考えを、説明することができる。	相手意識を持ち、積極的に人間関係を築こうとしている。	

研究	教科等 主題・ 内容等	<p>国語科・図画工作科</p> <p>認め合い高め合う活動を通して、課題を解決していこうとする児童の育成～21世紀型スキル&倫理観を育む学びの成立を通して～</p> <p>めざす授業の姿</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童自身が「考えたい」という思いで課題をもち、単元のゴールを見通しながら、積極的に課題を追究することができる授業 根拠を明確にしながら自分の考えを交流し、論理的思考を深めることができる授業 「ふりかえり」の場を通して、集団における考えの深まり・広がりや成長する自己と集団を実感することができる授業
----	-------------------	---

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)			
							□指標に係る取組状況	力 セ 達成 セ 評価	改善方策	□指標に係る取組状況	力 セ 達成 セ 評価	総合評価	改善方策
2	自ら考え学ぶ授業づくりの推進	★	見直し	<ul style="list-style-type: none"> 児童自身が課題を見つけ、根拠を明確にしながら考えを伝え合う授業実践 基礎学力の定着を目指した繰り返し学習の徹底 	<ul style="list-style-type: none"> 児童が「考えたい」と思う課題設定と振り返りの徹底 全学級における「思考と表現のスキル」の積極的な活用と評価 毎学期の校内検定(漢字・計算等)とカルタ学習(百人一首・ことわざ・四字熟語等)の実施 	<ul style="list-style-type: none"> めあてと振り返り、スキルの活用等に関する児童アンケートの肯定的評価全校90%以上 校内検定の全校平均点90点以上 カルタの学年目標合格者全校90%以上 							
2	城東校区三訓「時を守り、場を清め、礼を正す」の定着		見直し	<ul style="list-style-type: none"> 居心地のよい学級づくり(ふんわか言葉と無言掃除を重点的に取り組む蔵王しぐさの徹底) 協働性と自己指導力を育む学級活動 	<ul style="list-style-type: none"> 蔵王しぐさ強化月間中間発表での各学級の取組やきらきらカードの振り返りによる改善 懸賞制度の活用 学級力会議を計画的に実施し、結果の交流を行い、児童の協働性と自己指導力の向上 	<ul style="list-style-type: none"> 蔵王しぐさの強化月間での蔵王しぐさ振り返りで各項目平均達成率90%以上 無欠席等各種表彰の実施100% 学級力会議計画的な実施とアンケートの肯定的評価90%以上 							
2	主体的に取り組む体力づくりの推進		見直し	<ul style="list-style-type: none"> 自己指導力を育む体力づくり 	<ul style="list-style-type: none"> 児童が目標を持って取り組む体力づくり頑張りカード(体力テスト・水泳・持久走・縄跳び等)を活用して、年間を通して児童の目標を明確にし、評価・改善力、自己指導力を育む。 体力づくりに関する場を各階に配置し、体力の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 体力づくり各学年の目標を達成することができた児童を90%以上にする。(水泳・持久走・縄跳び等) 新体力テストの全学年・全項目を県平均70%にする。 							
2	保護者・地域に信頼される学校づくりの推進	★	見直し	<ul style="list-style-type: none"> 教職員の組織的指導力の向上 	<ul style="list-style-type: none"> スキル&倫理観の育成・定着に向けて教科と全教育活動のつながりを明確にしたカリキュラム開発・実践への参画意識の向上 児童と教職員の笑顔と元気を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> カリキュラムマップを活用した研修各学期1回以上行う。 職員・児童・保護者アンケートの各項目(教材研究等)90%以上にする。 							

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。